数理解析研究所講究録
487巻 1983年 65-78

穴あきレンズ空間のR^4への埋蔵について

神戸大理 細川藤次(Fujitsugu Hosokawa)
神戸大理 鈴木晋一(Shin'ichi Suzuki)

3次元多様体であるレンズ空間が4次元ユークリッド空間R^4に埋蔵できないことはすでに良く知られている。[3], [6] また,穴あきレンズ空間$L(2n,q)_0$はR^4に埋蔵できないが[1],穴あきレンズ空間$L(2n+1,q)_0$はR^4に埋蔵することができることもすでに知られている[9]。ここで,穴あきレンズ空間$L(p,q)_0$は、レンズ空間$L(p,q)$から1点の近傍を除いたものである。

Vをsolid torusとし,kを∂V上の(p,q)型結び目とする。すなわち,p, qは整数で,mを∂V上のmeridean, lをlongitudeとすると,kは∂V上で$pl+qm$にホモローグな単純閉曲線である。kをattaching 1-sphereとするVの2-handleを$h^2(p,q)$とすると,穴あきレンズ空間$L(p,q)_0$はHeegaard分解$V\cup h^2(p,q)$で表される。[7]

また,$L(p,q)_0$と$L(p',q')_0$とが同相になるのは,$p=p'$で

$$q \equiv \pm q' \pmod{p} \text{ または } qq' \equiv \pm 1 \pmod{p}$$

が成立することであることも良く知られている。

この論文では、R^4に埋蔵された穴あきレンズ空間が，R^4の中でどんな位置にあるかを調べることを目的とする。

ϕを$L(p,q)_0 \equiv V \cup h^2(p,q)$から$R^4$への同相写像とする。$\phi(V)$は$R^4$の中のsolid torusであるが，これは$R^4$における ambient isotopy $\{\eta_u\}_{u \in I}$によって、超平面$R^3[0]$の中の平凡なsolid torus $V_0 = \eta_1(\phi(V))$に移すことができる。

ここで，R^4を$R^3 \times [-\infty, \infty]$と考え，$R^3 \times (t)$を$R^3[t]$で表すことにする。

m_0を∂V_0のmeridean，l_0を∂V_0のprefered longitudeとする。つまり，m_0はV_0の中で円板の境界となり，l_0は$R^3[0] - \mathrm{Int}\, V$で円板の境界となっているとする。

このとき，$\eta_1\phi(m) = m_0$，$\eta_1\phi(l) = l_0 + \alpha m_0$（$\alpha$：整数）が一般に成り立つ。

このとき，2-handle $\eta_1\phi h^2(p,q)$のV_0へのattaching 1-sphereをk_0とすると，k_0は∂V_0上の$(p, q+\alpha p)$型結び目となる。

すなわち，$\eta_1\phi L(p,q)_0$は，m_0, l_0に関してHeegaard分解$V_0 \cup h^2(p, q+\alpha p)$を持つことがわかる。

$h^2(p, q+\alpha p)$を$D^2 \times [-1, 1]$と考えると，attaching 1-sphere k_0は$D^2 \times 0$の境界で，$D^2 \times 0$は$R^4 - \mathrm{Int}\, V_0$にproperに埋蔵

している円板となっている。

$\gamma_1 \phi L(p,q)_0 \equiv V_0 \cup h^2(p, q+\alpha p)$ が R^4 の中でどんな位置にあるかを調べるためには、2-handle $h^2(p, q+\alpha p)$ が、すなわち、$D^2 \times 0$ が R^4 の中でどんな位置にあるかを調べればよいことがわかる。

定理1. 穴あきレンズ空間 $L(p,q)_0$ が R^4 に埋蔵されているとすると、埋蔵写像 ϕ は次の条件をみたすようにすることができる。

(1) $\phi L(p,q)_0$ は Heegaard 分解 $V_0 \cup h^2(p, q+\alpha p)$ を持つ。V_0 は $R^3[0]$ の平凡な solid torus で、2-handle $h^2(p, q+\alpha p)$ の attaching 1-sphere k_0 は ∂V_0 上の $p l_0 + (q+\alpha p) m_0$ にホモローグな単純閉曲線である。

ここで、l_0, m_0 は ∂V_0 上の、それぞれ prefered longitude, meridean である。

(2) 2-handle $h^2(p, q+\alpha p)$ を $D^2 \times [-1,1]$ とすると、$k_0 = \partial D^2 \times 0$ で、$D^2 \times 0$ は $R^4 - \mathrm{Int}\, V$ の中の locally flat な円板で、次の条件をみたしている。

- maximal bands $\subset R^3[2]$
- minimal bands $\subset R^3[-1] \cup R^3[1]$
- saddle bands $\subset R^3 \times (1, 2)$
- $(D^2 \times 0) \cap R^3[0] = k_0 \cup O_1 \cup \cdots \cup O_\mu$

ここで，$O_i\ (i=1,2,\cdots,\mu)$ は meridean m_0 を V_0 の外へ少しずらした単純閉曲線で，$O_1\cup\cdots\cup O_\mu$ は平凡なからみ目になっている。図(1)

(3) $(D^2\times[-1,1])\cap R^3[t]=((D^2\times 0)\cap R^3[t])\times[-1,1]$，$(-\infty<t<\infty)$

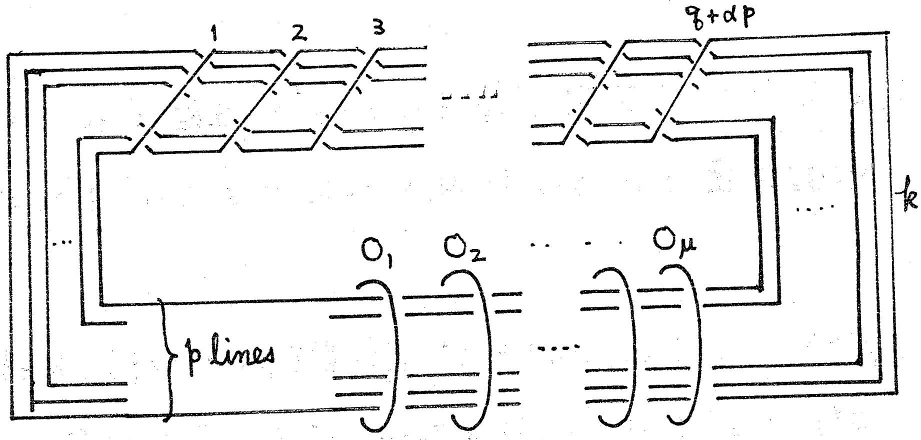


図1　からみ目 $l(p,q+\alpha p,\mu)$

定理1の証明は省略する。

R^4 の中に埋蔵されている穴あきレンズ空間 $L(p,q+\alpha p)_0$ が定理1の条件をみたしているとき，$L(p,q+\alpha p)_0\equiv V_0\cup h^2(p,q+\alpha p)$ は R^4 中の標準的位置にある，ということにする。また，定理1に出てくるからみ目 $k_0\cup O_1\cup\cdots\cup O_\mu$ を $l(p,q+\alpha p;\mu)$ で表し，$L(p,q+\alpha p)_0$ のからみ目，ということにする。

$l(p,q+\alpha p;\mu)$ は $R^3\times[0,\infty)$ で *locally flat* な穴あき円板 $(D^2\times 0)\cap R^3\times[0,\infty)$ の境界となっている。つまり，*a slice link in the weak sense* [2] になっている。

さて，$L(p,q)_0$ を R^4 で標準的位置にある穴あきレンズ空間で，Heegaard分解 $V_0 \cup h^2(p,q)$ を持ち，$h^2(p,q)$ を $D^2\times[-1,1]$ ，$L(p,q)_0$ のからみ目 $l(p,q;\mu)=k_0\cup O_1\cup\cdots\cup O_\mu$ $=\partial\left((D^2\times 0)\cap R^3\times[0,\infty)\right)$ とする。

$$l^+(p,q;\mu)=k_0^+\cup O_1^+\cup\cdots\cup O_\mu^+=\partial\left((D^2\times 1)\cap R^3[0,\infty)\right)$$
$$l^-(p,q;\mu)=k_0^-\cup O_1^-\cup\cdots\cup O_\mu^-=\partial\left((D^2\times -1)\cap R^3[0,\infty)\right)$$

とすると，これらは $R^3[0]$ 内のからみ目であり，

$$\mathrm{link}\left(l^+(p,q;\mu),\ l^-(p,q;\mu)\right)=0$$

が成立している。また，$O^+=O_1^+\cup\cdots\cup O_\mu^+$，$O^-=O_1^-\cup\cdots\cup O_\mu^-$ はそれぞれ，$R^3(-\infty,0]$ 内で，μ この円板の境界で，たがいに交っていないから，

$$\mathrm{link}(O^+,O^-)=0$$

また，k_0^+，k_0^- は，それぞれ (p,q) 型の torus 結び目で，O_i^+，O_i^- は図1の O_i と同じ位置にあるから，

$$\mathrm{link}(k_0^+,k_0^-)=\varepsilon pq \quad (|\varepsilon|=1)$$
$$\mathrm{link}(k_0^+,O_i^-)=\mathrm{link}(O_i^+,k_0^-)=\varepsilon_i p \quad (|\varepsilon_i|=1,\ i=1,\cdots,\mu)$$

が成り立つ。したがって

$$\begin{aligned}&\mathrm{link}\left(l^+(p,q;\mu),\ l^-(p,q;\mu)\right)\\ &=\mathrm{link}(k_0^+,k_0^-)+\sum_{i=1}^{\mu}\left(\mathrm{link}(k_0^+,O_i^-)+\mathrm{link}(O_i^+,k_0^-)\right)+\mathrm{link}(O^+,O^-)\\ &=\varepsilon pq+2p\sum_{i=1}^{\mu}\varepsilon_i=p\left(\varepsilon q+2\sum_{i=1}^{\mu}\varepsilon_i\right)=0\end{aligned}$$

となる。このことから次の定理が成立する。

定理2　$L(p,q)_0 = V_0 \cup h^2(p,q)$ が R^4 で標準的位置にある穴あきレンズ空間で，$L(p,q)_0$ のからみ目が $l(p,q;\mu) = k_0 \cup O_1 \cup \cdots \cup O_\mu$ のとき，次の(1)，(2)が成立する。

(1)　q は偶数である。

(2)　$q = 2m$ とすると $\mu = |m| + 2d$，$(d \geqq 0)$ で

$$\mathrm{link}(k_0, O_i) = -p \quad (i = 1, \cdots, |m|+d)$$

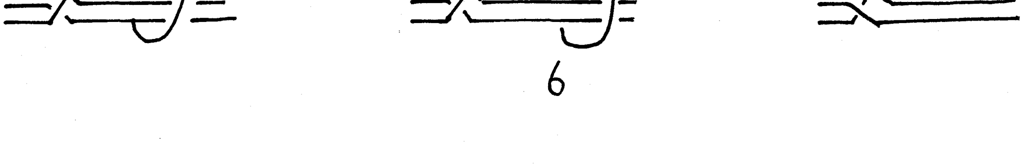
$$\mathrm{link}(k_0, O_i) = p \quad (i = |m|+d+1, \cdots, \mu)$$

この定理から，次の系を得る。

系　穴あきレンズ空間 $L(2n,q)_0$ は R^4 に埋蔵することはできない。

今迄の考察から，$L(p,q)_0$ が R^4 に標準的位置に埋蔵されていることと，からみ目 $l(p,q;\mu)$ が a slice link in the weak sense になることと同値になることがわかる。

さて，図2のような fusion により，上を通る線を下を通る線にすることができる，という操作を考えると，$l(p,q;\mu)$ が a slice link in the weak sense ということと，$l(p,q+2p;\mu+p)$ がそうなることと同値であることが容易にわかる。



図(2)

このことから、次の定理を得る。

定理3　$L(p,q)_0 \equiv V_0 \cup h^2(p,q)$ が R^4 で標準的位置にあるならば、$L(p,q\pm 2p)_0 \equiv V_0 \cup h^2(p,q\pm 2p)$ も標準的位置に実現することが可能である。

定理4，$2n+1$，$2m$ がたがいに素な整数のとき，

(1)　$L(2n+1,2m)_0 \equiv V_0 \cup h^2(2n+1,2m)$ は R^4 の標準的位置に実現することができる。

(2)　からみ目 $l(2n+1,2m;|m|+2d)$ が a slice link in the weak sense となる整数 $d \geqq 0$ が存在する。

そこで，次の問題が出てくる。

問題　どんな整数 d に対して $l(2n+1,2m;|m|+2d)$ が a slice link in the weak sense となるか？

この問題がわかると、穴あきレンズ空間の境界となる2次元結び目のクラスがわかることになる。

しかし，一般的な解答は相当難しいようであるが，$d=0$ のときにある程度その本質があるように思われる。

ここでは、$d=0$ のとき、ある条件付きで解けることがわかることを示す。定理の証明は論文 [10] を参照してもらうことにして，例で考え方の大筋を示すことにする。

$l(2n+1, 2m; |m|)$ が a slice link in the weak sense ならば、
$l(2n+1, 2m+2\alpha(2n+1); |m|+|\alpha(2n+1)|)$ もまたそうなることから、

$$-|2n+1| < 2m < |2n+1|$$

としてよく、また、torus 結び目の性質より

$$0 < 2m < |2n+1|$$

のときを考えれば十分である。そこで、

$$2n+1 = 2am \pm r \quad , a>0,\ 0<r<m\ , r と 2m は素$$

となる a, m, r を考えるとき、次の定理が成り立つ。

定理5. $m' \equiv m \pmod{r}$ かつ $r < m' < 2r$ とするとき、

$$m' - r \equiv \pm 1 \pmod{(2r - m')}$$

が成立するならば、$l(2am \pm r, 2m; m)$ は a slice link in the weak sense である。

例. $a=2$. $m=12$. $r=7$ で $2n+1 = 2am+r$ の場合: $l(55.24;12)$

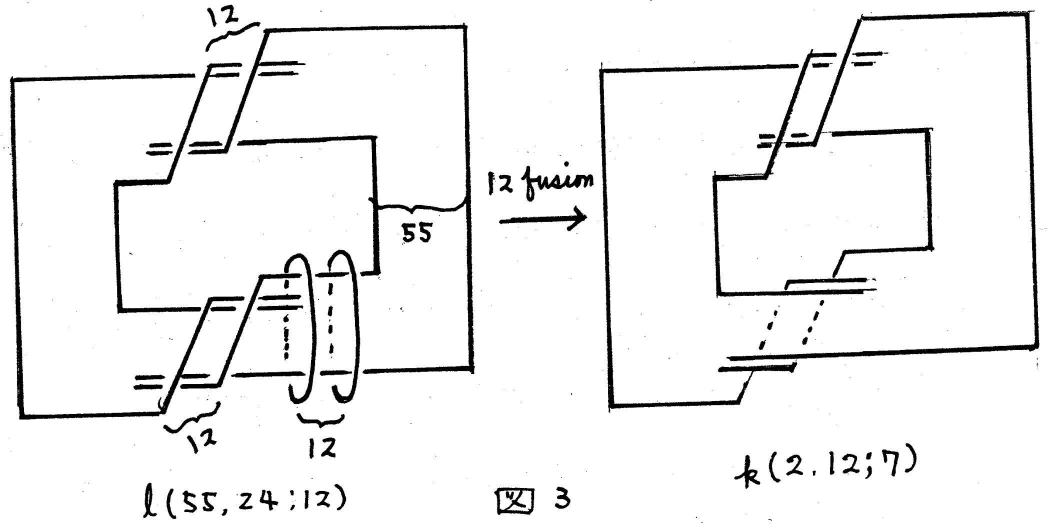
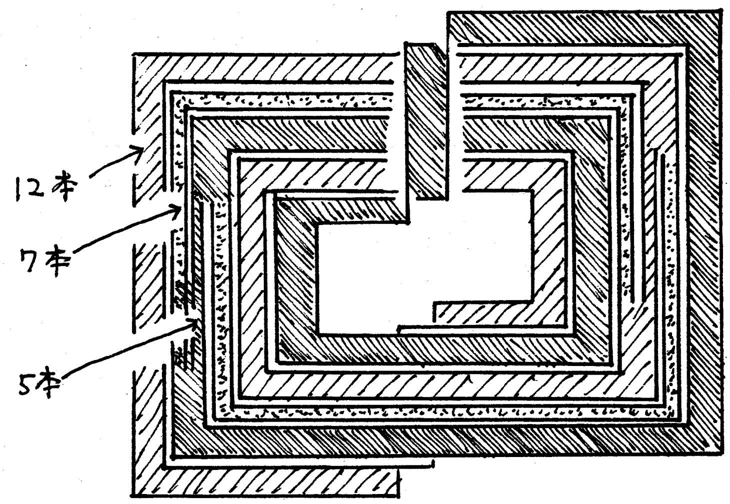
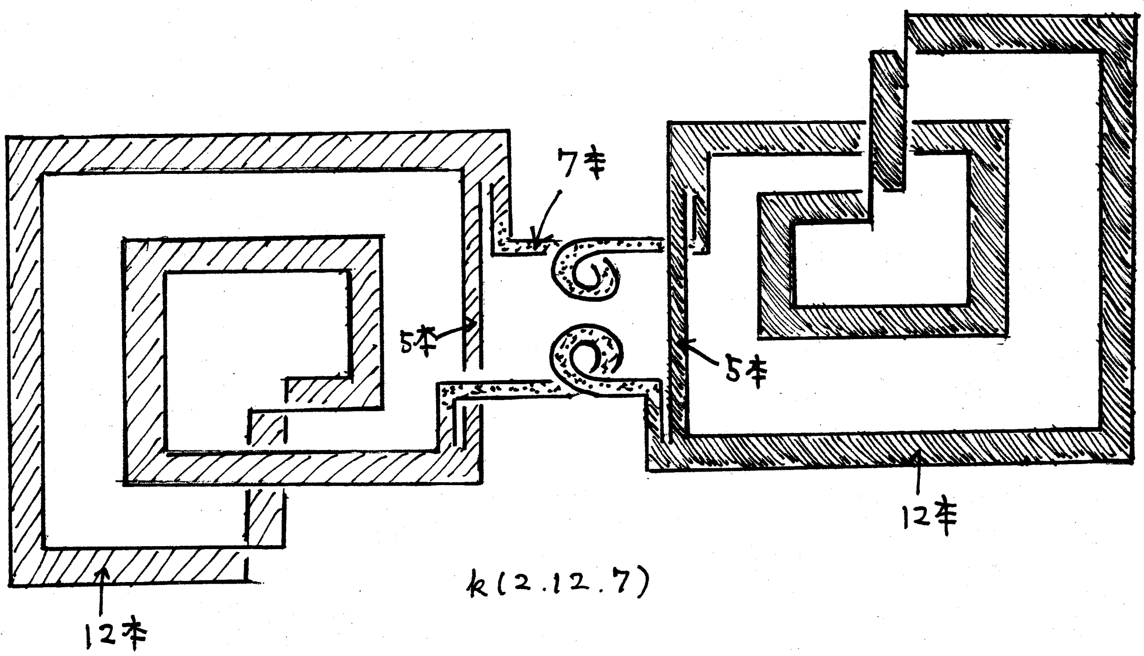


図3

$\ell(55,24;12)$ に図2と同じ fusion を12回ほどこして図3の右の結び目 $k(2,12,7)$ にする。$k(2,12,7)$ を図4の上のように上を通る線と下を通る線に分けて，図4の下のようにずらし，ねじれを調節して図5のようにする。



$k(2.12.7)$



$k(2.12.7)$

図 4

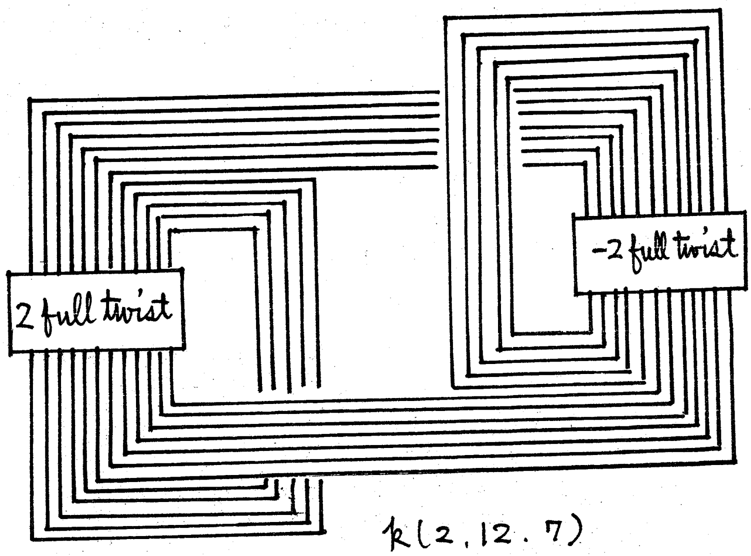


図 5

図5の真中に縦に通る左右5本ずつの線を ~~fusion~~ fission band でつなぎ、~~fusion~~ fission をすることにより、左右の twist を解消するようにする。そこで、fission band のつなぎ方が問題となる。この場合は図6のようにつなぎ、fission する。

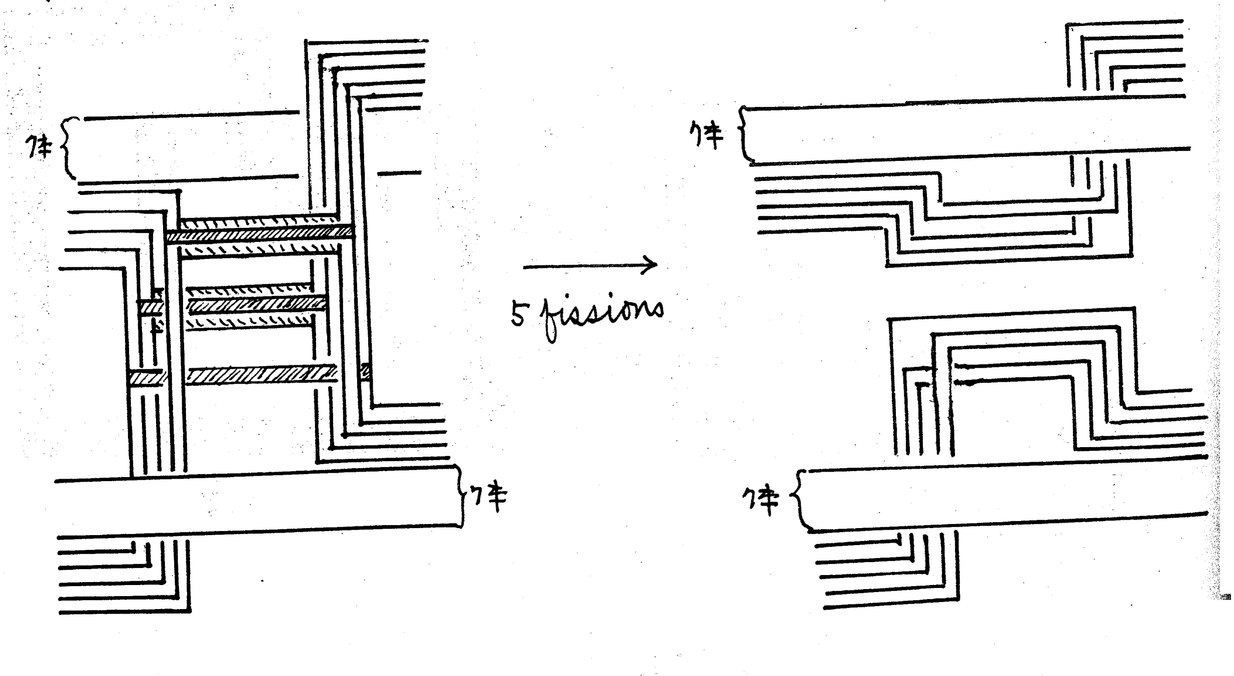


図 6

この5回のfissionでcomponentsが6のからみ目になるが，そのうち4つのcomponentsは容易に分離し，図7の下のからみ目が残る。

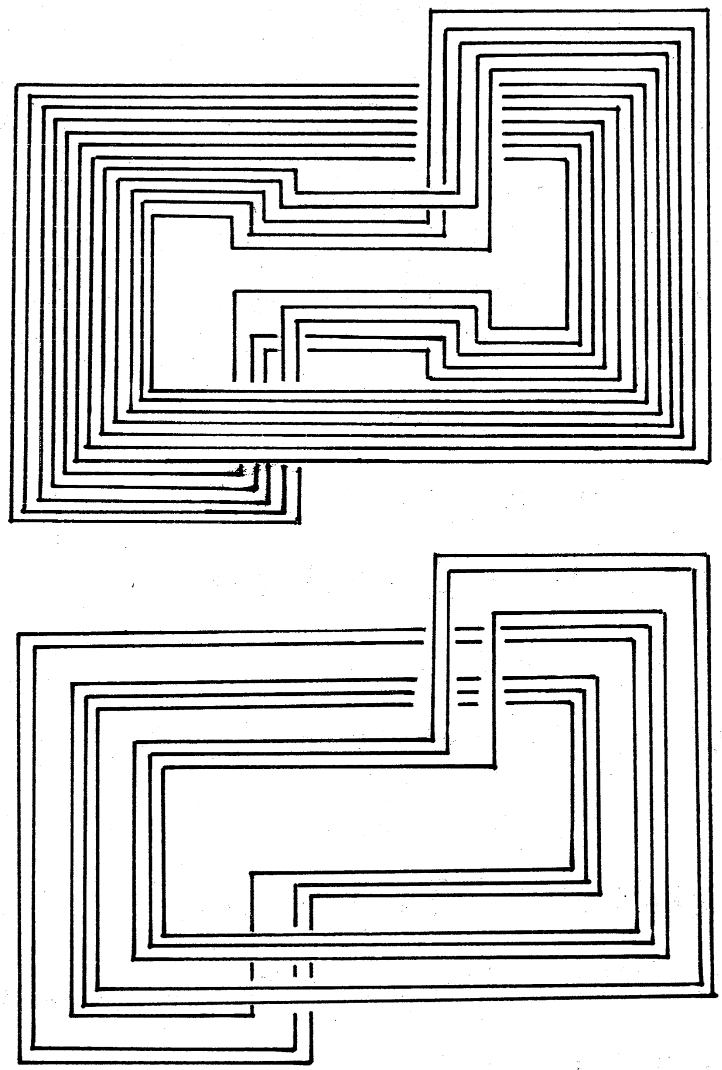
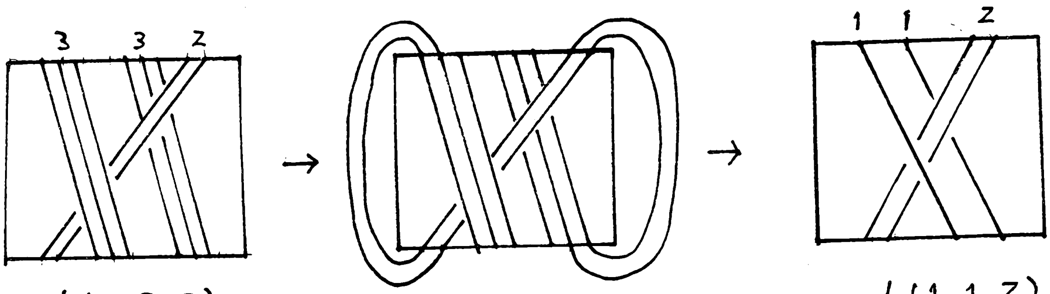


図　7

図7の下に残ったからみ目がcomponentsが2の平凡なからみ目になることがわかれば，$k(2,12,7)$がa slice knotになることがわかり，最初の$l(55,24;12)$がa slice link in the weak senseであることが示されたことになる。

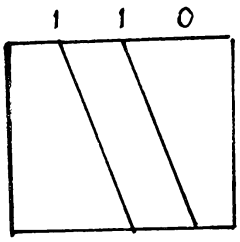
図7の下のからみ目は、一般には複雑になるが、これをbraidになおしてみると、図8の(ア)となる。このbraid $b(3,3,2)$で表すことにする。$b(3,3,2)$は一部を上下つなぐ操作で$b(1,1,2)$に変形される。



$b(3,3,2)$
(ア)

図 8

$b(1,1,2)$



$b(1,1,2)$は最後は$b(1,1,0)$と右図のようになり、平凡なからみ目であることがわかる。

$k(2,12,7)$は上の証明ではribbon knotになっていることもわかる。

一般的に困難な点は、最初のfusionをどのようにしたらよいか？、という点と、次に図6で示したfission bandをどのようにつけたらよいか？という点がある。そのため、定理5のような条件がつけられた。

最初のfusionを同じようにした場合、fission bandをどのようにつけてもうまくいかない例もあるので、問題の解決は、更に工夫が必要である。

定理の証明など省略したものが多いが、詳細は[10]を参照されたい。

References

[1] D.B.A. Epstein : Embedding punctured manifolds, Proc. Amer. Math. Soc., 16 (1965), 175~176.

[2] R.H. Fox : Some problems in knot theory, Topology of 3-Manifolds and Related Topics (M.K. Fort, Jr. (ed.)), Prentice Hall, N.J., (1962), 168~176

[3] W. Hantzsche : Einlagerung von Manigfaltigkeiten in Euklidische Räume, Math. Z., 43 (1938), 38~58.

[4] F. Hosokawa and A. Kawauchi : Proposals for unknotted surfaces in four-spaces, Osaka J. Math., 16 (1979), 233-248.

[5] A. Kawauchi, T. Shibuya and S. Suzuki : Descriptions on surfaces in four-space I, Normal forms, Math. Sem. Notes Kobe Univ. 10 (1982), 75~125.

[6] H. Schubert : Knoten mit zwei Brücken, Math. Z., 65 (1950), 133~170.

[7] H. Seifert und W. Threlfall : Lehrebuch der Topologie, Teubner, Leipzig-Berlin, (1934)

[8] S. Suzuki : Knotting problems of 2-spheres in 4-sphere, Math. Sem. Notes Kobe Univ., 4 (1976), 241-371

[9] E. C. Zeeman : On twisting spun knot, Trans. Amer. Math. Soc., 115 (1965), 471~495.

[10] F. Hosokawa and S. Suzuki : On Punctured Lens Spaces in 4-Space, Math. Sem. Notes Kobe Univ. 10 (1982) 323-344.